子宮頸がんが増加しています！

令和4年4月からヒトパピローマウイルス（HPV）ワクチン接種の積極的勧奨が再開されています。他の子どもの定期予防接種の接種率と比較してヒトパピローマウイルス（HPV）ワクチンの接種率は低い状況にあります。また、全国的にも子宮頸がんの発症率は年々増加傾向にあることから、諏訪中央病院の産婦人科医である池田速水先生に子宮頸がんについてお話を伺いました。

子宮頸がんの取り巻く現状

子宮頸がんは子宮の入口、子宮頸部にできるがんです。後発年齢は20歳代後半から30歳代で、出産年齢と重なることが知られています。

最近若い世代、20代前半の方でも見られるようになり、実はその頻度は増加傾向にあるのです…。

総合的にみても、日本では毎年約1万人もの女性の方が新たに子宮頸がんと診断され、約2、900人の方が亡くなっています。

この発症率は、乳がんをはるかに上回っており、子宮頸がん予防の正しい知識と選択がとても大切になってきます。

子宮頸がんの原因 ～ヒトパピローマウイルス（HPV）～

子宮頸がんは、正常細胞から「異形成」という前がん病変を経て、がんに移行します。この「異形成」に至る原因は、ヒトパピローマウイルス（HPV）の持続感染であることが知られています。

HPVは、男女問わず、性行為で一度は感染しますが、自己免疫力によってその約90％が自然消滅します。

しかし、なんらかの理由で免疫力の低下が続くと、HPV持続感染となって、子宮頸部、つまり子宮の入り口の細胞を変えてしまうのです。

異形成について

異形成には、軽度異形成、中等度異形成、高度異形成があり、中等度異形成の約10％、高度異形成の約20％ががんに移行すると言われています。よって、この異形成になる前に予防することがとても大切になります。

HPVワクチンについて

異形成・子宮頸がんにならないためには、HPV感染を予防することであり、その方法としてHPVワクチンが推奨されています。

HPVには200種類以上の型があると言われています。その中で16型と18型が子宮頸がんの約7割を占めています。

またそれ以外の7つの型が、子宮頸がんのみならず、肛門がん、女性の膣がん、男性の陰茎がんなどの原因になると言われています。

公費によるHPVワクチンの定期接種には、今まで2価（サーバリックス）と4価（ガーダシル）の2種類のワクチンがありましたが、令和5年4月から9価（シルガード）も選択できるようになり、同年5月から公費接種が始まりました。

定期的な子宮頸がん検診とこのHPVワクチンを併用することにより、より高い頻度で、子宮頸がんの予防が見込まれると考えられています。

しかし、わが日本はというと、HPVワクチン接種普及率、子宮頸がんの検診受診率は先進国で最下位なのです。

最後に―

今まで述べたように、子宮頸がんは予防できる段階まできています。

子宮頸がんは、20歳～40歳代の若い世代、つまり出産年齢層に著しく増加しており、日本最大の改善問題である少子化にも、拍車をかけているのです。

つまり子宮頸がん予防は、極めて重要で真剣に取り組むべき課題であり、正しい情報を的確かつ早急に、必要な世代にお伝えすることがとても重要になるのです。

Interview

＝諏訪中央病院　産婦人科医＝
池田　速水 先生

ヒトパピローマウイルス（子宮頸がん）予防接種

●定期接種

中学1年～高校1年相当年齢の女子（対象者の方には通知が済んでいます。）

●キャッチアップ接種

平成9年4月2日～平成19年4月1日生まれの女子（対象者の方には令和4年9月までに個別通知しています。）

※予診票を紛失された方は再発行いたしますので、健康管理センターまでご連絡ください。

子宮頸がん予防接種の詳細はこちらから！

問 健康づくり推進課（健康管理センター）健康総務係　☎82-0105（直）